パウロ・フレイレの思想と現代の教育

野元弘幸

一　現代社会における人間化の課題

パウロ・フレイレの主著『被抑圧者の教育学』や『伝達か対話か』が今日でも世界中で読み親しまれているのは、何よりも、現代社会において依然として多くの人が貧困や抑圧に苦しめられ、非人間的な状況に置かれているからに他ならない。フレイレが彼の教育思想の骨格を示す主著を執筆した一九六〇年代から七〇年代は、欧米諸国によるアジア・アフリカ・ラテンアメリカへの新植民地主義的支配と、それに対抗する第三世界の民衆運動が生まれ、鋭く対立した時代であった。同時に、先進諸国内での差別や貧困の克服を目指す社会運動が広がり、いわゆる「内なる第三世界」の問題も可視化された時代であった。それから半世紀が過ぎるが、今日においてもなお世界の深刻な貧困や抑圧の問題は解決に至っていない。それどころか、新自由主義を原理とする経済や社会のグローバル化により、富める者と貧しい者の格差は一層拡がり、格差や支配の構造を維持・再生産するための権力による抑圧や支配のシステムが強化されつつある。

こうした状況は、日本においても例外ではない。一九八〇年代以降の日本の経済・社会システムは、受益者負担主義や労働市場の流動化などの新自由主義的政策により大きく変化し、その結果として貧困問題が深刻となっている。非正規雇用労働者は、雇用者全体の約四割に近づきつつあり、不安定な雇用と低賃金に苦しんでいる。二〇二〇年春以来の新型コロナウイルス感染症拡大に因り大学生が生活に困窮しているのも、背景には貧困問題が存在する。営業時間短縮や休業のためにアルバイト収入が大幅に減って苦しむ多くの大学生は、実はコロナ禍以前から高額の授業料を払い、「奨学金」という名の学生ローンを利用しながら、アルバイト収入でのギリギリの生活を強いられる抑圧状況にあった。

一方、現代世界において早急に解決しなくてはならない人間化の課題として、環境破壊や化石燃料使用による地球温暖化の進行があげられる。国連の「持続可能な開発目標」（SDGs）の達成により地球温暖化の進行を抑えなくては、海面上昇や気候変動により、人類は生存の危機に直面すると指摘されており、これらの問題への取り組みも不可欠であろう。さらに、世界で多発する自然災害から人々の命を守るということも、現代世界が直面する課題として自覚化されつつある。二〇一一年の東日本大震災を経験した日本では、その教訓を防災教育の充実に活かす取り組みが行われているが、海外ではまだまだ災害への備えや防災教育は不十分で、大きな自然災害が発生するたびに多くの人が犠牲になっている。

二　民衆運動の行動理論

パウロ・フレイレの思想や教育論は、こうした非人間的状況にある人々の解放やそのための社会変革、環境破壊による人類滅亡からの回避をはかるための民衆運動や市民活動に大きな示唆と力を与えていることで知られるが、そのポイントは、これらの運動や活動を支える文化行動の理論や実践の原理を提示している点にある。

まず第一に、フレイレの思想は一人ひとりが個として、また主体として尊重され、「なりゆきまかせの客体から自らの歴史をつくる主体」（ユネスコ「学習権宣言」（一九八五年））へと自己形成することを促し、励ますという、人間解放を目指すあらゆる運動の基本的な原理を

のもと　ひろゆき
1961年生まれ
東京都立大学教授
1989～91年にブラジル留学／フレイレのゼミで学ぶ
「日本におけるパウロ・フレイレ教育論の受容と展開」
『人文学報』（2020年）、
モアシル・ガドッチ『パウロ・フレイを読む』を里見実と翻訳
（亜紀書房、1993年）